2022 年度 一般財団法人 全国科学博物館振興財団
「科学系博物館の活性化への助成事業」実施報告

１．事業名　自然史標本の新たな活用法とジオラマ制作による企画展の開催

２．実施者氏名　　天満　和久

３．実施内容　　標本を作製する際、その種がもつ生態的な特性を視覚的に表現できるようないきいきとした標本を作製することでき、それを企画展示へと活用することができた。

４．実施期間・場所　　2022 年 11 月 1 日～2023 年 3 月 31 日
貝塚市立自然遊学館内及び天王寺動物園

５．事業の目的　　標本や昆虫に対する一般の方々への印象及び関心度の向上とともに、自然史標本を作製することがさまざまな要因で減少している中で、自然史標本の価値とその必要性を再認識してもらうことを目的とした。

６．具体的実施内容及び方法

おもに貝塚市内における陸域と水域に生息する昆虫を中心とし、展示対象とする昆虫を採集あるいは冷凍保存されている個体を用いて、その種がもつ生態的特性を表現するような標本作製を行った。また、それらの生息環境に合わせたジオラマもその重要な要素として作製した。また、その標本やジオラマの制作過程なども映像として保存し、その作製技術を継承するためのひとつのツールとした。これらを当館の企画特別展示とするとともに、より広く周知するため、他施設（天王寺動物園）にも協力を要請して展示させてもらうこととした。

７．得られた成果・効果

今回のような昆虫の「飛ぶ」「食べる」「争う」など、生き生きとした姿を、写真や絵画ではなく、時を止めたような躍動的な一瞬を昆虫標本で表現する手法を確立することができた。それにより、広く一般の方々にも昆虫が進化の過程で獲得した体の構造をさまざまな視点でみることができるようになった。あわせて、標本に対する一般の方々の考え方が変わり、自然史標本に対する価値を認識してもらうことができるようになった。このようなことを通じて、博物館が果たす役割と有する機能、そして何よりも多様な生きものをはぐくむ貴重な自然環境の重要性を再認識していただくことができた。

８．今後の進展または計画

今回制作した標本やジオラマを大阪府南部泉州地域の学校などで巡回展示を行い、今回の目的をより広く周知していく。

９．使用物品概要

備　品	・箱型アクリルケース（300×300×300mm）	２個
	・深型標本箱（425×325×55mm）	２個
	・UV ライト（レジン硬化用）	１個
	・アクリルフレーム（A1 及び A3）	各１個
消耗品	・レジン（大容量 500ｇ）	１個
	・レジン着色剤（12 色）	１個
	・ジオラマ用砂材他	１式
	・樹脂粘土（モデナ）	３個
	・軽量粘土（ハーティクレイ）	５個
	・スパチュラ（セット）	１式
	・草木（ライト素材）	１式
	・ガラスケース	12 個
	・スタンドライト	14 個

科学系博物館の活性化への助成事業実施状況写真
（２０２２年度）

氏　名　　天満　和久
機関名　　貝塚市立自然遊学館

◆購入物品による展示

アクリルケース（30cm×30cm×30cm）に昆虫の生息環境を再現したジオラマ
（左：能勢町のクリ林、右：貝塚市の「せんごくの杜」の雑木林）

アクリルフレーム（Ａ１サイズ、Ａ３サイズ）に昆虫の生態を表現した切り絵（すべて原寸大）
（左：能勢町のクリ林の多様な昆虫、右：ウマノスズクサにくるジャコウアゲハ）

標本箱にて、さまざま昆虫の命の輝きの一瞬を切り取ったような標本展示
（左：樹液に集まる昆虫たち、右さまざまな昆虫の飛翔）

企画特別展示では、すべての制作過程を分かりやすく紹介するために簡単な動画も制作

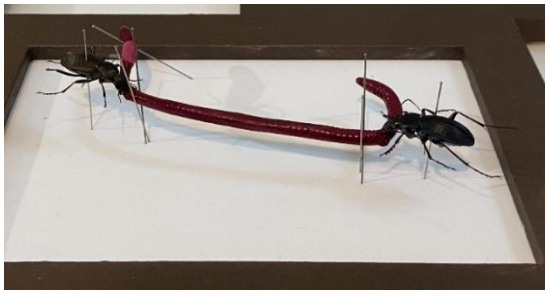
ガラスケースにて、苔テラリウムの中で直翅類の生息空間を表現

◆今回の助成事業で実際に作成することができた昆虫の自然史標本（企画特別展示のようす）

タガメ（飛翔、卵の保護、捕食、交尾）

カブトムシの三つ巴

セスジササキリモドキ



ミミズを食べるオサムシの仲間

ヤマサナエのやご

エサを捕獲するキカマキリモドキ

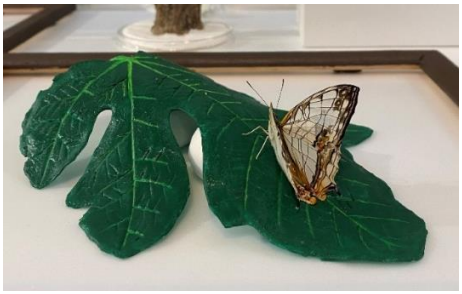
ムラサキシジミ

サラサヤンマ　コシボソヤンマのやご

ヤブヤンマの産卵

威嚇するコロギスの幼体

サツマヒメカマキリ　　オオモンツチバチ　ハヤシノウマオイ



イチジクに来たイシガケチョウ

飛翔するオニヤンマとコガタスズメバチ